研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第５号

《研究ノート》
平底円筒形押型文土器に関する一考察
今村　結記

縄文時代の安山岩製スクレイパーについて
桑波田　武志

鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介
黒川　忠広

古代から中世における遺構の方向
－農業開発総合センター遺跡群を事例として－
東　和幸

鹿児島県内の平安時代の土器供膳具の様相
－川内平野の資料を中心に－
岩元　康成

赤色顔料の原料採取地を求めて
－鹿児島県上水流遺跡・関山遺跡の例から－
内山　伸明・橋本英樹ほか

トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ｉ）
永濵功治・内山伸明・中村幸一郎

鹿児島県の埋蔵文化財調査におけるデジタル技術導入の現状と課題
－埋蔵文化財センターの取り組みを中心として－
馬籠　亮道

埋蔵文化財を活用した授業の展開
國師　洋之

《資料紹介》
竪野冷水窯跡出土遺物の追加報告
－物原Ｉを中心に－
関　明恵

西ノ平遺跡出土墨書土器
長﨑　慎太郎

荘上遺跡出土資料
－その１－
森　幸一郎

科学分析報告一覧
南の縄文調査室

放射性炭素年代測定集成
内山伸明・園田ひとみ・長野眞一

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2012. 3

縄文の森から　第５号

平底円筒形押型文土器に関する一考察
今村　結記 …… 1

縄文時代の安山岩製スクレイパーについて
桑波田　武志 …… 8

鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介
黒川　忠広 …… 16

古代から中世における遺構の方向　－農業開発総合センター遺跡群を事例として－
東　和幸 …… 28

鹿児島県の平安時代の土器供膳具の様相　－川内平野の資料を中心に－
岩元　康成 …… 37

赤色顔料の原料採取地を求めて　－鹿児島県上水流遺跡・関山遺跡の例から－
内山伸明・橋本英樹・古谷充章・團野瑛章・辻広美・高田潤 …… 47

トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅰ）
永濵功治・内山伸明・中村幸一郎 …… 55

鹿児島県の埋蔵文化財調査におけるデジタル技術導入の現状と課題
－埋蔵文化財センターの取り組みを中心として－
馬籠　亮道 …… 59

埋蔵文化財を活用した授業の展開
國師洋之 …… 69

〈資料紹介〉竪野冷水窯跡出土遺物の追加報告　－物原Ⅰを中心に－
関　明恵 …… 75

〈資料紹介〉西ノ平遺跡出土墨書土器
長﨑　慎太郎 …… 87

〈資料紹介〉荘上遺跡出土資料　－その１－
森　幸一郎 …… 95

科学分析報告一覧
南の縄文調査室 …… 99

放射性炭素年代測定集成
内山伸明・園田ひとみ・長野眞一 …… 106

埋蔵文化財を活用した授業の展開

國師　洋之

Process of the History Class Utilizing the Archaeology

Kokushi Hiroyuki

要旨

本稿では，埋蔵文化財を活用した授業展開の事例について２つの実践記録を掲載した。１つめは，「まいぶん出前授業」を事例とした授業展開である。具体的には，「遺跡や発掘調査の概要→学校所在の周辺遺跡と出土遺物の紹介→各時代の出土遺物を観察して当時の人々の生活を知る」という展開例である。２つめは，教員を対象にした短期講座『埋蔵文化財を活用した授業の展開』を事例に，埋蔵文化財を活用して授業を行う際のポイントを紹介した。同時に，講座内容が受講者に「伝わる」ための工夫や受講者を飽きさせない講座の組み立て方について提案した。

キーワード　埋蔵文化財の活用　授業の展開　まいぶん出前授業　講座の組み立て方

１　はじめに

私は現職以前，小学校に在職していた。６年生担任の時，子どもたちに社会科の授業で歴史を教えていたが，埋蔵文化財の活用は皆無であった。当時は，本物の土器や石器を見たり触れたりできたら子どもたちは喜ぶだろうな，と思ってはみたものの具体的に遺物を借用するにはどういう手続きが必要なのか，またどんな授業展開があるのか皆目見当がつかなかった。

その後，当センターに在職するようになって，県内各地の遺跡の発掘調査及び埋蔵文化財の普及啓発に従事する機会を得た。なかでも教員を対象にした埋蔵文化財活用講座は，長年関係機関と連携して担当してきた。

このことをとおして，埋蔵文化財を学校現場に活用できたら，子どもたちはさらに自分たちの地域の歴史に興味をもつのではないかという思いが強くなってきた。

そこで，本稿では埋蔵文化財を活用した授業はどうしたらいいか，先生方に授業をしてもらうにはどうしたらいいかの一助にという思いから，３つにまとめた。

１つめは，埋蔵文化財を授業に活用する意義についてまとめた。文化財の活用は学習指導要領等に明記されている。それを引用しながら文化財を活用する意義や効果について述べた。

２つめは，「まいぶん出前授業」での実践を再現することで，埋蔵文化財を活用した授業の展開例をまとめた。

３つめは，教員を対象に行なった短期講座での実践についてまとめた。先生方に「文化財を活用した授業をしてみたい」と思わせるような講座にするための諸工夫を述べた。

２　埋蔵文化財を授業に活用する意義

歴史の授業は教科書や資料集を中心に行われることが多く，児童生徒は実物の資料に触れる機会が少ないのが現状である。

そのような中，学習指導要領解説では次のように文化財の活用について明記している。

> ・我が国の歴史上の主な事象について，人物の働きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財，資料などを活用して調べ，歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに，（中略）
> ・博物館や郷土資料館等の施設の活用を図るとともに，身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れるようにすること。
>
> 出典：文部科学省編『小学校学習指導要領解説 社会編』（平成20年度改訂）

このように文化財を観察したり，出土遺物に直接触れたりすることは，児童生徒にとって学習の理解度を高めるとともに自分たちの住む地域の歴史に興味をもつきっかけになる。

３　「まいぶん出前授業」での実践

「まいぶん出前授業」は，平成21年度から当センターの事業として行なっている。

これは，申し込みのあった学校へ職員が出向いて，すべての教育活動を対象に出土遺物やパネル等を使って授業の支援を行うものである。

これまでの実績は以下のとおりである。

平成21年度　小学校１校，中学校１校

平成22年度　小学校10校，中学校８校，高校１校

平成23年度　小学校12校，中学校２校

ここでは，鹿児島市立田上小学校６年生（３クラス88人）を対象に行なった出前授業（平成23年４月22日実施）の様子を再現し，埋蔵文化財の活用法を提示する。

授業の主な流れ及び指導案は，次のとおりである。

なお，パワーポイントによる資料作成は当センターの廣栄次氏が行った。

≪授業の主な流れ≫
・遺跡と発掘調査の概要を知る。
・学校周辺の遺跡及び発掘調査の成果を知る。
・学校周辺の遺跡から発見された遺構・遺物を観察したり，説明を受けたりする。

第６学年社会科学習指導案（略案）

○単元「縄文のむらから古墳のくにへ」

○本時の目標

・田上小地区周辺の遺跡の所在を知り，遺跡が身近にあることを捉える。また，田上小周辺の代表的遺跡である武遺跡の縄文時代から古墳時代に関する発掘調査の成果を見聞し，既習内容を深めることができる。（知識・理解）

・これまでの既習内容をもとに，実物資料を用いた学習を体験することで，歴史に関する興味・関心をさらに高めることができる。（関心・意欲・態度）

○本時の実際

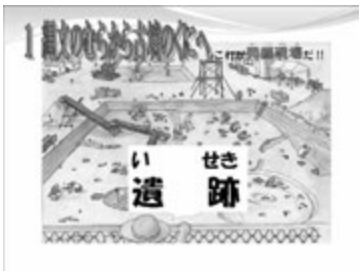
主な学習活動	時間	指導上の留意点	
1　遺跡って何だろう。 2　鹿児島市内には，どれくらいの遺跡があるのだろうか。 3　田上小周辺には，どんな遺跡があるのだろうか。 4　本時の学習問題を確認する。 田上小周辺にある武遺跡では，昔の人々がどんな暮らしをしているのだろうか。	15分	・鹿児島市内には多くの遺跡があることに気づかせる。 ・縄文時代から現代までの時間軸を紙テープで示し，縄文時代から古墳時代までの時間軸（時代の長さや時代的位置）を捉えさせる。	・プロジェクター ・教科書 ・テープ
5　縄文時代～古墳時代までの武遺跡の発掘調査の成果を知る。 (1)縄文時代 ・集石遺構 ・土器，石器 (2)　弥生時代 ・土器， 石器（石包丁） (3)　古墳時代 ・竪穴住居跡 ・土器	25分	・時代毎（縄文，弥生，古墳）に３組のブースに分かれて，説明及び遺物観察を行い，順繰りにブースを替えていく。※各ブース約８分で移動 ・各時代の基本的特徴や遺構・遺物を説明する。 ・実際に遺物に触れて，重さや質感を体感させる。	・パネル （遺跡写真） （遺構写真） （遺物写真） ・遺物
6　本時の学習を振り返る。 (1)　振り返りカードにわかったことや知りたいことなどを記入する。 (2)　発表する。	5分		

以下に，実際の授業の展開を再現する。

（１）遺跡や発掘調査について

まず，遺跡及び発掘調査について簡単な説明を行なった。

遺跡とは過去の人たちが生活していた場所であること，発掘調査は基本的に人力で行うなどの説明をパワポで示しながら行なった（第１図，第２図）。



第１図

次に，田上小が所在する鹿児島市内に遺跡がいくつあるかを聞いた（第３図）。子どもたちが10，20，100など予想を発表したあとに，正解の450遺跡(平成23年度)を教えると，遺跡数の多さに子どもたちは驚きの声をあげた。

第２図

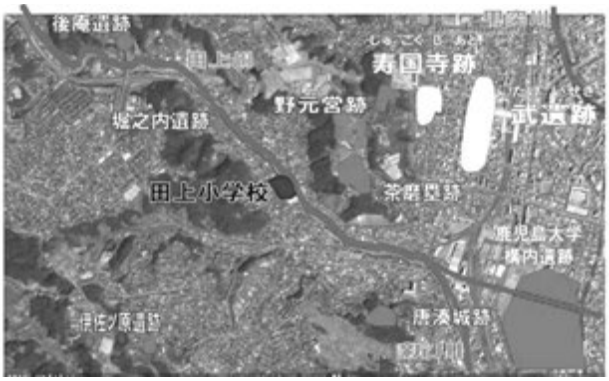
第３図

（２）田上小周辺の遺跡，出土遺物の説明

ここでは，子どもたちに遺跡の存在を身近に感じてもらうために，田上小周辺の９つの遺跡を簡単に紹介した（第４図）。その後，寿国寺跡と武遺跡については，発掘調査中後の様子や，主な遺構・遺物をパワポで詳しく紹介をした。

これは，あとで子どもたちが実際の遺物に触れたり観察したりする活動への伏線である。

１つめに紹介したのは寿国寺跡である。ここは，九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って平成19，20年度に発掘



第４図

調査が行われた。

主に江戸時代の石組遺構，井戸跡，陶磁器，木製品などが発見された寺院跡である。

まず，寿国寺の絵図資料（第５図）を提示して，発掘調査の場所がこの絵図の中にも描かれていることを教えた（第５図左下の場所)。

第５図

そして，発掘調査中の写真（第６図）を見せて，今はどうなっているかを子どもたちに問うた。

子どもたちからは，道路，橋，ビルなどの意見が出たが，現在は新幹線の橋架下になっていることを教えると，興味深く写真に見入っていた。

第６図

最後に，寿国寺跡から出土した遺物写真を見せて，簡単な説明を行った。

２つめに紹介したのは武遺跡である。寿国寺跡同様に，九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って平成５年度に発掘調査が行われた。

第７図

ここでも最初に，発掘調査時の写真（第７図）を見せて，その後どのようなったかを子どもたちに発表させた。

現在は，鹿児島の玄関口となっている鹿児島中央駅（第８図）が建っていることを教えると子どもたちは驚きの声をあげた。

第８図

そして，今日は主に武遺跡で発見された縄文時代から古墳時代の遺構・遺物について詳しく学習していくことを子どもたちに伝えた（第９図）。

第９図

このように，授業の導入時では，子どもたちに遺跡を身近に感じてもらうために学校周辺の遺跡を紹介したり，遺跡の発掘調査時と調査後の写真を対比して見せたりすることを試みた。

その後，第10図のように体育館内に「縄文時代」「弥生時代」「古墳時代」の３つブースを設けて，各時代の出土遺物及び遺構写真のパネル等を展示した。

クラス毎に各ブースに分かれ，約８分で次のブースに移動して３つのブース全てを回れるようにした。なお，各ブースに一人ずつセンター職員がついて，遺構・遺物の説明を行った。

第10図

以上，「まいぶん出前授業」での実践を例に，「遺跡や発掘調査の概要→学校所在の周辺遺跡と出土遺物の紹介→各時代の出土遺物を観察して当時の人々の生活を知る」という授業展開の事例を提示した。

しかし，実際の授業で埋蔵文化財を活用していくためには，より多くの先生方に活用方法を知ってもらうことが必要である。

そこで，鹿児島県総合教育センターで行われた短期研修講座で具体的な実践例を示すことにした。

４　短期研修講座での実践

ここからは，鹿児島県総合教育センター主催の短期研修講座での実践を述べる。テーマは，「埋蔵文化財を活用した授業の展開」で教員を対象に講座を行なった。

この講座で留意した点は次の３つである。

（１）事前打ち合わせを入念に
（２）どうすれば「伝わる」か
（３）短時間単位で場面を構成する

以下，３つの留意点について詳述する。

（１）事前打ち合わせを入念に

主催者は何らかの目的をもって研修講座を企画している。そこで企画の意図を事前に把握しておくために，次

のような質問をした。

・先生方にどういったことを話してほしいですか ・先生方にこの講座で何を持ち帰ってほしいですか

主催者からの回答は次のようなものであった。

・専門的な話は避けてほしい ・実物資料等を提示して先生方の興味・関心を高めてほしい ・発掘調査の成果を話してほしい

そこで，これらを講座の内容に極力組み入れるようにした。このように，主催者の意図・目的を把握して，それを最大限活かすためにも事前の打ち合わせを入念に行うことは大切である。

（２）どうすれば「伝わる」か

年間300を超える講演・研修をプロデュースする大谷由里子氏は講師の心構えとして次のように述べている。

> 多くの講師は，「伝える」ことに一生懸命になります。しかし大切なのは「伝える」ことではなく「伝わる」こと。（中略）
>
> そこで「伝わる」ことを意識すると，目の前にいる聞き手に合わせて事例を何パターンか出したり，表現方法を変えるなどして試してみることで，
>
> 「どんな言い方なら伝わるか」
>
> 「どんな例えなら伝わるか」
>
> にチャレンジすることになります。その結果，参加者を飽きさせない工夫が生まれ，「伝わる」につながるのです。
>
> 出典：『はじめて講師を頼まれたら読む本』（P.40，P.41）

今回の講座では，どんな言い方や例え方をしたら先生方に「伝わる」かを意識して講座を組み立てた。

（３）短時間単位で場面を構成する

人の集中力の持続時間は，個人差もあるが約15分と言われている。そこで，受講者を飽きさせないための工夫として，

一場面を短時間で完結し，多くの場面を構成する

ことを試みた。

今回の持ち時間は40分だったので，一場面の時間を５分または10分として，以下の６つの場面を構成した。

①　埋蔵文化財センターの紹介・今回の講座内容について（５分） ②　情報収集の仕方（５分） ③　埋蔵文化財を活用した授業展開その１（10分） ④　埋蔵文化財を活用した授業展開その２（10分） ⑤　出前授業と貸出事業の紹介（５分） ⑥　まとめ（５分）

（４）講座の実際

ここでは，パワーポイントと実物資料の土器を用いて行なった講座の実際を，上記の６つの場面にそって再現する（講座は平成23年10月28日実施）。

①埋蔵文化財センターの紹介・今回の講座で伝えたいこと（５分）

自己紹介と埋蔵文化財センターの紹介をした後，

「埋蔵文化財と聞いて思い浮かぶものは何ですか」

「これまで埋蔵文化財を活用した授業をしたことがありますか」

と質問して，埋蔵文化財に対する認知度等を確かめた。

その結果，埋蔵文化財についてはある程度は知っていたが，授業での活用は皆無であった。

そこで，今回の講座で伝えたいこととして次の２つを話した。

・埋蔵文化財を活用した授業を年１回，１時間でもいいから行なってほしい ・児童生徒が文化財に興味をもつきっかけをつくってほしい

この２点は，目の前にいる先生方にこうなってほしいという願いをこめたものである。

その後，「今日はこの３つの話をします」と講座内容のポイントを提示した。

・地域の遺跡及び史跡の情報収集 ・授業への活用 ・出前授業と貸出事業

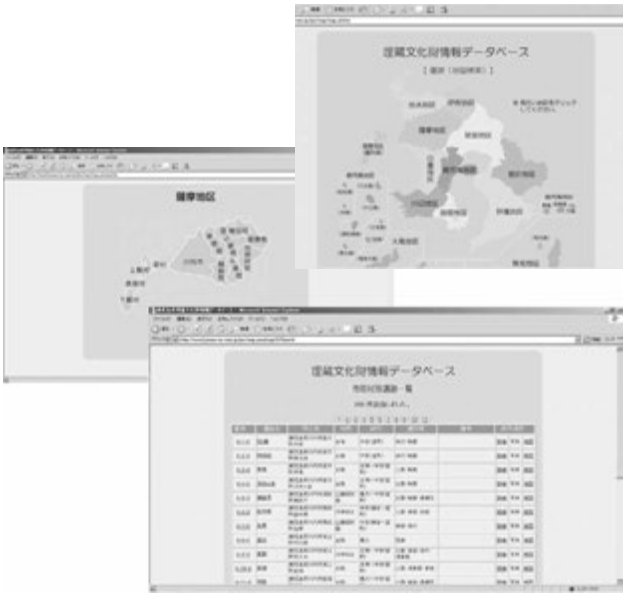
②情報収集の仕方（５分）

埋蔵文化財を授業で活用するためには，先行事例など情報収集が必要である。

そこで，情報収集の方法について３つ紹介をした。

・埋文センターHP ・市町村HP ・書籍

なかでも，当センターHPの埋蔵文化財情報データベースを利用して，鹿児島県内の遺跡の情報を得る手順を紹介した（第11図）。



第11図

③埋蔵文化財を活用した授業展開その１（10分）

ここでは，時代の特徴を教えた後で，本物の土器や石器を観察させる，という授業展開を取り上げた。

今回は縄文時代の特徴をどう教えたらいいかを体感してもらうために，先生方を児童生徒役にして模擬授業形式で進めていった。

まず，縄文時代の長さを知ってもらうために帯グラフを提示した（第12図)。

「縄文時代は今から約12,000年前に始まったと言われています。平成の現在の長さをこのくらいだとすると縄文時代の長さは，どのあたりまででしょう」と発問して，数名の先生を指名して帯グラフに指さしてもらった。

その後，「縄文時代は今から約2,500年前のここまでです」と，時代の長さを示した。

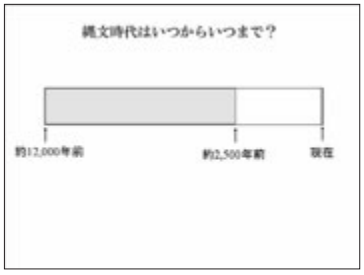
このように，時代の長さを把握させるために，帯グラフを活用することは有効である。

次に，縄文時代の人々がどんな食生活をしていたかをクイズ形式で出題した(第13図)。

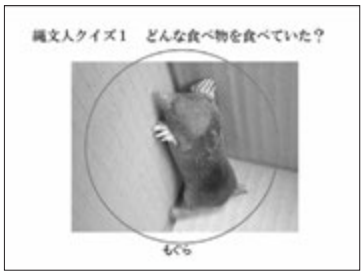
もぐらのほか，いるか，ねずみ，あざらしの写真を提示して，当時の人々はこれら全てを食料にしていたことを知らせた。また，ほかにも多種多様なものを食材にしていることから(第14図)，縄文時代の特徴は，「狩り」「漁」「採集」の３つがキーワードであることを示した。

３つのキーワードを示した後，食物を調理したり保存したりするために利用された土器に場面転換した。

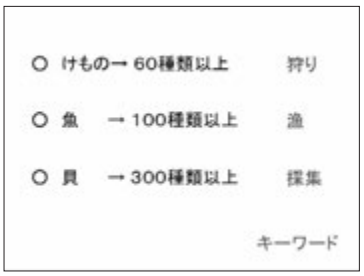
ここでは，教科書に掲載されている縄文土器の文様と県内遺跡で出土した土器の文様との違いに気づかせ(第15図)，実物の土器を詳しく観察する視点づくりを提示した。



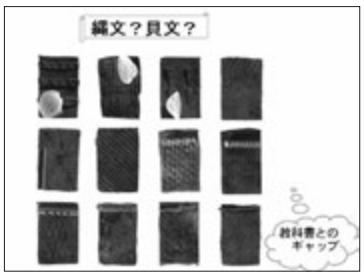
第12図



第13図



第14図



第15図

④埋蔵文化財を活用した授業展開その２（10分）

２つめの事例は，本物の土器を観察させて用途を教える，という授業の展開である。土器は用途によって形や大きさなどが変わる。このことを理解させることに重点をおいた授業展開である。具体的には，

まず，古墳時代の代表的な土器（甕，壺，高坏）を名称は伏せた状態で，机上に置く。

次に，土器の名称を予想させて，先生方に答えさせる。

さらに，土器を観察させてこれらの土器が何に使われていたかを先生方に答えさせる。

そして，当時の人々は土器を用途によって使い分けていたことを理解させる。

という，授業展開である。

⑤出前授業と貸出事業の紹介（５分）

「まいぶん出前授業」は平成21年度から，遺物貸出は平成22年度から当センター事業として行なっている。

出前授業では，申し込みのあった学校へ出向いて，すべての教育活動を対象に土器やパネル等を使って授業の支援を行う。

また，貸出事業は実物資料を貸し出して，児童生徒が教室の中で本物の土器や石器などに触れることができるようにする。

これらの事業を先生方に知ってもらい活用していただくために，パンフレットを配布して過去の出前事業の様子をパワポで見せながら説明していった。

⑥まとめ（５分）

まとめでは，私が一番伝えたいことを再度話す，つまり「シメ」の話をすることを試みた。実際につぎのような話をした。

埋蔵文化財を活用した授業は難しくありません。

私は学校現場にいるときは，日々の授業に追われて埋蔵文化財を活用した授業は皆無でした。

しかし，現在の仕事をとおして気づいたことがあります。

それは，埋蔵文化財に触れることは私たちの先人の生活の知恵に触れることであるということです。

この先人の工夫や知恵をぜひ子どもたちが体感して，歴史に興味・関心をもってほしいのです。

そのためにも，１年間で１時間でもいいので，30分でもいいのでぜひ埋蔵文化財を活用した授業を行ってみてください。

先生方が忙しいときには，私たちが支援にいきます。

埋文センター職員もどんどん活用してください。

こうした最後の「シメ」の話をすることは，講座のメッセージを明確にして，受講者の満足につなげていくことになる。

以上，教員を対象にした講座を事例に，埋蔵文化財を活用した授業展開のポイントを紹介した。併せて，講座

内容が受講者に「伝わる」ための工夫や受講者を飽きさせない講座の組み立て方について述べた。

5　おわりに

「百聞は一見にしかず，百見は一行にしかず」ということわざがある。

百回見るよりは，一回体験したほうがよくわかるという意味である。

これは，歴史の学習でも同じことがいえる。

土器や石器の写真を見るより，実物を手にとり観察したほうが，色・大きさ・質感などがよくわかるのである。

また，人間の脳は五感をとおして学んだことに対しては，記憶の強化がなされるといわれている。

つまり，埋蔵文化財を授業で活用して，子どもたちが五感をとおして学ぶことは，学習の定着をより確かなものにするともいえる。

さらに，実物を手にしたときの興奮，数千年の時をへて当時の人と今を生きる人が同じものを手にしているというロマン，これも写真では得られない醍醐味である。

今後も，「まいぶん出前授業」や遺物貸出事業等をとおして，埋蔵文化財を活用した授業の展開事例を積極的に紹介するとともに，授業開発及び教材開発を行っていきたい。

※平成24年度からは「まいぶん出前授業」の窓口が財団法人鹿児島県文化振興財団上野原縄文の森に代わる。

【引用文献】

1　文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説　社会編』東洋館出版社

2　大谷由里子 2009『はじめて講師を頼まれたら読む本』中経出版

【参考文献】

上之園健二・八木澤一郎・東和幸・関明恵・馬籠亮道・彌榮久志 2002『寿国寺跡･梅落遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書 40

彌榮久志 2003『武Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書 59

國師洋之 2004「教科書の簡潔な記述を深く調べる場面をもとう」『授業のネタ学習ワーク』明治図書

國師洋之 2006「埋蔵文化財を活用した授業の一提案」『大河８号』

大谷由里子 2009『はじめて講師を頼まれたら読む本』中経出版

児玉幸多編集 2011『日本史年表・地図』吉川弘文館

詳説日本史図録編集委員会 2010『山川詳説日本史図録』山川出版

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要　縄文の森から　第５号

発行年月　　2012 年３月
編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
　　TEL　0995-48-5811
　　E-mail　minami@jomon-no-mori.jp
　　URL　http://www.jomon-no-mori.jp
印　刷　（有）国分新生社印刷
　〒899-4301
　鹿児島県霧島市国分重久 627－1